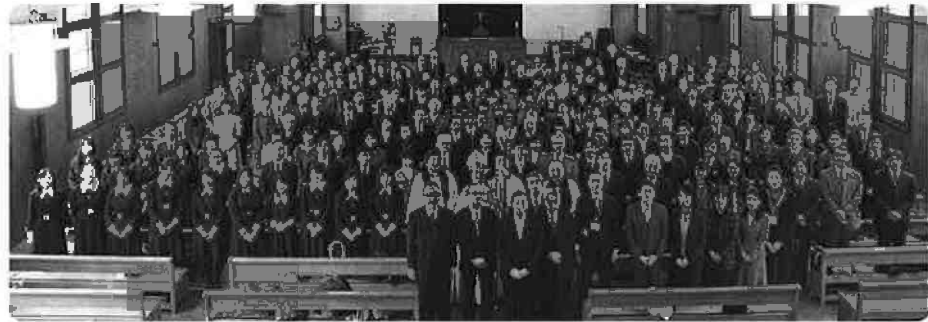




Kobe Shoin Women's University Repository

Title	一粒のからし種
Author(s)	荒井 章三 (ARAI Shozo)
<i>Citation</i>	Chapel News, Vol.113 : 4-5
Issue Date	2012.3
Resource Type	その他
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	2012年1月7日(土) 神戸聖ミカエル大聖堂 松蔭女子学院創立120周年創立記念礼拝での奨励



『一粒のからし種』

【新約聖書 マルコによる福音書4章30節】

2012年1月7日(土) 神戸聖ミカエル大聖堂
松蔭女子学院創立120周年 創立記念礼拝での奨励

荒井 章三
(元学長・前院長)



一八八八年十二月十八日に書かれた一通の手紙があります。東京在住の英国聖公会のエドワード・ビカーステス主教が、のちに松蔭女子学院を創立することになる英国聖公会の宣教団体、Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Parts (以下S.P.G.)の女性部門の機関紙である『一粒のからし種』の編集長に宛てた手紙です。長い手紙なので、要約します。

拝啓 先般SPG宣教師ならびに東京の聖アンデレ伝道会年次総会において、満場一致で下記の決議が行われました。

「本会議は、SPGレイディース・アソシエーションの神戸における宣教活動の成果に心からの満足の意を表明するものです。また、このたび日本の女性を対象とする活動が始められたことに鑑み、神戸に学校を創設することの重要性について、レイディース・アソシエーションに認識を新たにしたいと希望いたします。神戸は近代日本において急速に発展しつつある主要都市の一つです。その人口は四年前にはわずか十万人でしたが、今日ではその二倍近い数字になっています。神戸は非常に美しい土地で、この地において、SPGは過去十二年間にわたって宣教活動を進めてまい

りました。宣教活動は、現在のところ、順調に運営されている男子校、ミカエル教会、女性のための毎週の教室、市内の講義所等を中心に進められています。

今、ここで、読者の皆様とともに考えてみたいことがあります。それは十二年におよぶ労苦の成果がなぜここで止まっているのだろうかという問題です。それを解決するにはどうしたら良いのか、疑いもなく、それは女生徒のためのミッションスクールを創設することではなければなりません。そのために不可欠なのが資金です。このようなお願いをすると、皆様のなかに、それは不可能ではないかという考が出てくることを心配いたします。「不可能」ということは、「不可能」という考が脳裏をかすめ、「不可能」という言葉が口にされたときに、現実になっていくことがらなのです。そして、「不可能」という言葉が口にされなくなったときに初めて、祈りは忘れられず、愛はさめることなく、努力は緩むことがないのです。

聞くところによりますと、「神戸」という文字には、ベテル(神の門)という意味があるそうです。きっと、皆様は、皆様の努力によって、日本の女生が「神の家」に招き入れられたと知ること以上に勝る報酬は考えられないことなものである。土に蒔くときには、地上のどんな種よりも小さいが、蒔くと、成長してどんな野菜よりも大きくなり、葉の陰に空の鳥が巣を作るほど大きな枝を張る。」

日本では、小さいものを喩えるとき「ケシ粒」のように小さいという使い方をします。私はドイツで黒い「ケシの実」が見ついたモーニング・クーヘンというパンを好んで食べましたから、「ケシ粒」は見たことがあるのですが、からし種というのを見たことはありません。からしの木を見たこともありません。まして、葉の陰に空の鳥が巣を作る野菜など想像することができません。しかし、この喩え話の中で重要なのは「からし種」がきわめて「小さい」ということです。この小さな種を秋に蒔くと、春には一メートル位の大きさになって、「菜の花」のような黄色の花を咲かせるようになります。しかしながら、種がすべて育つとは限りません。四章の初めの「種を蒔く人のたとえ」では、蒔く人の力量や場所によっては、育たないことが多いと述べられています。良い土地に蒔かれた種だけが成長して、実をつけると述べられています。

学校は、種とその種を蒔く人と、蒔かれる場所とで成り立っています。良

のではないのでしょうか!

キリストの名における忠実なるしもべ
E・ビカーステス

この手紙からは、新しい女学校をつくらうとする強い意思が伝わってきます。ここに言及されている女性宣教師が、後に第一代目の校長となるハナ・バーケンヘッド先生です。彼女は、レイディース・アソシエーションから派遣されたばかりでしたが、同年の十二月八日には、迎えに来られたフォス先生と一緒に船で横浜から神戸に向かっています。先ほどのビカーステス主教の手紙の日付は十二月一日でしたから、主教の意気込みが感じられます。

翌年の一八八九年の三月三〇日に出されたバーケンヘッド先生の手紙では、「懸案の女学校開設の件については、寄宿生が十人ばかりと日本人の寮母がいさえすれば、普通の家ででも立派に始められると思います。寄宿生として受け入れてもらえるようになれば、すぐにでも入学したいという若い女性が、すでに何人かいます」と書いていて、男子校で英語を教えながら、日本語を勉強しつつ、女学校開設の夢をレイディース・アソシエーションに伝えています。しかし、フォス先生は、

い種も蒔く人の力量や、蒔かれる場所によって、芽を出さないこともありまます。また、蒔く人一人一人の力量が良くて、それぞれの関係が悪くては、良い場所とは言えないでしょう。そのようにならないよう、私たちは留意しなければなりません。ゼミナリオとか、ゼミナールという言葉があります。ゼミナリオは神学校、ゼミナールを約めたゼミは、大学では「演習」のことを指しています。しかし、その語幹の「ゼミ」は、ラテン語で、「種」をさし、「ゼミナリウム」とは、種を育てる苗床のことを意味しています。つまり、学校とは、種を蒔き、苗を育てる場所なのです。その場所では私たちは、蒔き、育てる役割をもっているのです。今から百二十年前の一月八日、十一名の生徒とともに始まった松蔭女子学院は、たしかに大きくなりました。しかし、そのことよりも、私たちが、一粒、一粒の種を、立派に育てているか、そのことのほうが大切でしょう。創立百二十年を迎える年にあたって、松蔭に関係する者すべてが、良い蒔き人であるか、良い苗場を作っているかを、常に、互いに検証しながら、進んで行かなければならないという決意を新たにしたいと思えます。

(あらい しょうぞう)